

宮川啓子自伝

堤屋のこと



平成10年の家族写真

はじめに

歴史の短い堤屋の家ではあるが、祖父も父も早く亡くなり、この家で長く暮らしてきたのは四代目のわたしだけである。

五代目になる伴夫婦も、六代目の孫も遠く離れて住んでいるので、家の由来などについて、折にふれて話してはいるが、きちんと伝えておかなければならないと思っていた。また自分の為にも、わたしが知っていることを書き残しておかなければならないと思いつつ、これまで纏めることも叶わずにいた。この春、近所の高橋勉さんがご自身の歩んで来られた自伝を上梓されたので拝見した。立派な本で、わたしもただ流されてきただけの来し方ではあるが、この際、昔の事どもを含め、断片的ではあるが書き綴ってみることにした。

宮川啓子自伝 堤屋のこと

はじめに	9
第一章 堤屋の歴史	9
一、初代 喜八郎	9
二、二代 磯太郎	11
三、三代 静男	13
四、四代 啓子	17
第二章 幼き日	18
一、父と母の結婚	18
二、啓子誕生	19
三、幼い頃の生活	20
四、父の死	23
五、父の背中	24
六、母の思い	30
第三章 学生時代	33
一、国民学校の頃	33
二、戦争の影	36
三、中学校の頃	40
第四章 青春の日々	43
一、風越高校時代	43
二、飯田病院に勤務	45
三、結婚と出産	48
第五章 流れる歲月	48
一、家の建て替え	52
二、流れる月日	52
三、洞の稲作	57



初代 喜八郎

我が家は、飯田市下久堅南原、天龍川の東段丘にある山あいまの小さな洞ほら、その坂道を少し登ったところに建つ。屋号を堤屋つつまやという。これは文永寺にまつわる伝説の「堤」が我が家の近くにあったため、この辺りの小字名を堤田つつまだといい、その堤からの屋号としたと言いう。曾祖父が清中屋きよなかやより分家して興し、父静男（明治二十九年一月二十二日出生）で三代、わたしで四代目となる堤屋は、次のように引き継がれてきた。

第一章 堤屋の歴史

一、初代 喜八郎

宮川の初代は、曾祖父・喜八郎で、本家「清中屋」宮川清助の次男。妻みやを伴って明治元年分家し、本家から洞を少し上ったこの地に宮川家を起たした。みやは、文永寺二天門前の舊家「仲仙道」橋爪豊四郎（現在仲仙道はなくなり、牧野内貞夫さん宅が建

四、養蚕のこと	59
五、前山の植林	60
六、夫・明さんのこと	62
第六章 旅の日記 ヨーロッパ二十日間の旅へ	67
附記 宮井三霊碑について	82
おわりに		